

## 教育福祉的視座からみた駄菓子屋模擬店の有用性

— 地域で子どもを育てる体制作りの新たな考察にむけて —

八尋 茂樹\*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2015年11月18日受理)

2011年より5年間、新見公立大学・短期大学の大学祭等で開催している駄菓子屋模擬店において、店員を担当したボランティアより「新見市内で児童から声をかけられてうれしかった」、「市内で児童とお互いに声をかけ合う関係になった」という報告を受けることがあった。筆者は、仮にこの駄菓子屋模擬店での短時間の交流に、初めて出会う大人と親密な関係性を児童に築かせる特性が備わっており、その後も交流を継続できるのであるとすれば、この特性を応用することによって、教育（家庭教育や学校教育）と福祉（児童家庭福祉）の狭間の課題である「地域で子どもを育てる体制作り」に役立てることができると考えた。そこで本研究では、大学祭後におけるボランティア店員と児童たちの関係性の調査を行った。得られたデータをもとに教育福祉的視座からの検証を進めた結果、駄菓子屋模擬店を通過した児童は、ボランティア店員と日常の地域生活においても親密な関係に発展させたことが確認された。今後はこの特性を取り入れた「場」を市民に提供する方法や手段について具体的に考察していき、地域に貢献できる議論に発展させていく。

(キーワード) 駄菓子屋模擬店, 教育福祉の特性, 地域で子どもを育てる体制作り

### 1. 研究目的

筆者は、2011年度から2015年度まで5回にわたって、新見公立大学・短期大学の大学祭等の行事を利用しながら駄菓子屋模擬店を運営してきた。そして、そこに来店する子ども（本稿では幼児から高校生までとする）やその保護者、市民の言動について調査し、駄菓子屋模擬店を通じた社会貢献活動の可能性について考察を行ってきた（八尋, 2011, 2012, 2013, 2014a）。一般的な模擬店に関する学術的な議論は、販売実習に代表される体験学習の教育的効果についての検討等にとどまっており、模擬店が及ぼす社会貢献の影響や教育福祉の効果についての検討は行われてこなかった。特に駄菓子屋の教育的特性を生かした「駄菓子屋模擬店」の実践を通しての考察は他に行われていない。あるいは、駄菓子屋そのものの特性についての研究も非常に少なく、例えば、松田（2002, 2010）が駄菓子屋での子どもたちの遊びや、店主とのやりとり等を分析した上で提示している、「地域の中に溶け込んでいる駄菓子屋の存在には社会教育的意義が備わっている」という論に限られてくる。そして、筆者は駄菓子屋の「模擬店」においても、松田が提示する「実際の駄菓子屋」の「社会的有益性」に近い特性を、これまでの研究の中で見出ししてきた。

例年、筆者が企画している駄菓子屋模擬店は、8～10

名の市民および学生のボランティアが運営を担当しているが、大学祭からしばらく経過した頃、ボランティア店員が新見市内で児童から声をかけられることがあったり、お互いに声をかけ合う関係になったとの報告を2013年から度々受けてきた。通常、年に1度の模擬店に来店した児童たちは、1年にたった1度しかボランティア店員と接触する機会はないはずである。しかし、仮にこの駄菓子屋模擬店での短時間の交流に、初めて出会う大人の市民と親密な関係性を児童に築かせる特性が備わっており、大学祭後も交流を続けられるのだとすれば、この特性を応用することによって、日常の地域生活においても市民が児童と信頼関係を結んだ上で「子ども見守り活動」を行う体制に発展させることができるのではないかと考えた。

そこで本研究では、駄菓子屋模擬店を通してボランティア店員と児童が短時間で親密な人間関係を築き、さらにはその関係性を維持できることを検証するために、大学祭後におけるボランティア店員と児童たちの関係性を調査した。また、大学祭に訪れた児童が多く在住する地区の納涼祭を訪れ、そこに来店している店舗（屋台）を利用する児童の様子についても調査を行った。駄菓子屋模擬店と、それに来店形態がよく似た納涼祭の屋台での児童の言動を比較して、両者の特性の類似点や相違点を見出すことに努めた。これらの検証を進めることにより、

\*連絡先：八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

教育（家庭教育や学校教育）と福祉（児童家庭福祉）の狭間で常に課題として挙げられる「地域で子どもを育てる体制作り」についての基礎的考察が可能となると考えた。

## II. 調査の内容

2015年は、5月16日の大学祭において駄菓子屋模擬店を展開した。運営は新見市在住の市民ボランティア4名、本学学生ボランティア6名の協力を得た。模擬店で取り扱った商品は表の通りである。駄菓子・駄玩具の値段は10円、20円、30円、くじは50円の4段階に設定した。

表 駄菓子屋模擬店で販売した商品

駄菓子	うまい棒、きなこ棒、フルーツ糸引き飴、モロッコヨーグル、いか太郎、カレー味せんべい、フラワートップ菓子、ココアシガレット、花串カステラ
駄玩具	妖怪けむり、紙せつけん、おめん、吹き戻し笛、スライム、おはじき、ソフトグライダー、スーパーボール、ファッションリング、カチューシャ、ミニカー、紙風船
くじ	スーパーボール当て、ONE PIECE 文具当て、ディズニー文具当て

来客数は児童72名、大人105名の計177名であった。

今年度の研究では、下記の3項目の調査を進めた。

1. 駄菓子屋模擬店の様子をビデオカメラ3台で撮影し、来客者の行動と会話を記録した（注1）。さらに、模擬店員は来客者の言動に気づきがあった場合にメモを取った。また、大学祭内で学生のみで運営している他の一般的な模擬店（チキンナゲット店やチュロス店等）での児童と学生店員の様子を観察し、メモによる記録を取った。児童の言動の観察は、9時から16時までの7時間行った。
2. 模擬店員のうち、市民ボランティア2名（30代女性および20代男性）および学生ボランティア2名（10代女性および10代男性）に対し、模擬店終了後の5月18日から8月13日までの約3ヶ月間、駄菓子屋模擬店に来店した児童たちとの接触の有無、交流の有無、面識の深まり等について聞き取りを行った。聞き取りは1ヶ月に1回、計3回実施した。
3. 2015年7月に大学周辺地区で開催された2つの地域

納涼祭を訪問し、屋台での児童たちの様子を観察し、記録を取った。

## III. 調査結果

### 1. 模擬店での児童たちの言動

ビデオによる解析では、同一の児童が駄菓子屋模擬店に寄った回数は、最も多い児童で12回、最小が1回で、平均6.3回であった。2度目以降の来店では新たに友人を誘って連れてきたり、毎回異なる友人と複数回訪れる児童もいた。2人以上で来店する児童が72名中63名と非常に多く、単独の児童は9名にとどまった。また、最初は保護者と一緒に来た児童も、2度目から友人や単独で訪れることが多かった。来店した児童をおおよその学齢別に分類すると、小学生が7割程度と最も多く、中学生が約2割、高校生と幼児はわずかであった。

何度来店しても何も買わずに店内を一周して駄菓子や駄玩具を眺めているだけであったり、模擬店員と話をしに来るだけの児童も42名と多かった。児童が模擬店員に値段を確認することをきっかけに両者が会話に発展させるケースが24件あった。会話の内容は、大学祭に関するものの他、児童の日頃の学校での生活ぶりやスポーツ少年団での活動のこと、家族のこと、好きなテレビ番組やタレント、好きなお菓子というように多岐に渡った。また、5年連続で駄菓子屋模擬店員を担当した市民ボランティアが、毎年駄菓子屋模擬店に来る児童について、成長するにつれて買う量が増えていたり、嗜好が変わってきた等の指摘をした。前年までに来店したことのある児童の中には市民ボランティアの顔を覚えており、「今年もいるじゃん」というような声掛けをしてきた者も複数名いた。

今回の調査では、学生のみで運営のチキンナゲットやチュロス等販売の一般的な模擬店における児童および学生店員の様子も観察した。1品が300円から400円することもあり、購買層は児童より大人が中心で、児童の中では中高生が中心であった。小学生以下の児童は自身のお金で購入するのではなく、保護者に買ってもらっていた。また、同じ店舗に複数回足を運んだ児童は、年齢に関係なくひとりも見られなかった。学生が児童と話し込む風景も全く見られず、両者は売買に必要な最小限の会話にとどまっていた。さらに、店員の学生たちに来店した児童のことを質問してみたが、「小学生の女の子が来た」、「おしゃれをした中学生くらいの男の子たちが何人か来た」といった、漠然とした記憶しか残っていなかった。これに対し、駄菓子屋模擬店のボランティア学生は、「Aちゃんはお兄ちゃんの買い物の世話ばかり焼いている」、「B君はくじをたくさん引きたいから、お金を節約するために、一度お昼ご飯を食べにX小学校のすぐ横の家に帰っ

た)、「C君は何も買わないで、話だけしに来る」というように、具体的に児童の名前を挙げて、その児童の言動を詳細に記憶していることが多かった。

## 2. ボランティアと児童たちの関係性

大学祭後の約3ヶ月間、市民ボランティア2名および学生ボランティア2名に、駄菓子屋模擬店に来店した児童との市内での接触状況について聞き取りを行った。その結果、以下のような回答を得られた。

### ・市民ボランティア・30代女性

男児、女児に関係なく、下校時に会おうと、「あっ」と言って立ち止まって手を振ってくれる女子小学生や、お互いに挨拶をすることがあった男子小学生がいた。その男子小学生とは、下校時複数回会おうことで親密度が上がった。さらにはその児童と一緒に下校していた模擬店には来ていなかった男子児童とも仲良く話すようになった。複数の男子中学生が下校時に道端に自転車を停めて話し込んでいた際に、車ですれ違ったこちらの存在に気づき、ほぼ全員が笑顔で手を挙げたりして挨拶をした。

### ・市民ボランティア・20代男性

これまで地元のケーブルテレビや新聞で報道される児童の活動のニュースに関心を持たず、全く気に留めることがなかったが、模擬店で児童たちと知り合ってから積極的に見るようになった。模擬店後、下校時や休日に7～8名ほどの男子小学生を見かけることがあり、遠くでも存在に気づいた時はお互いに手を振ったり、時には児童たちの方から駆け寄ってくれることもあった。スーパーマーケットで保護者と一緒にいた女子小学生は、「大学のお菓子屋さんの人」と保護者に紹介することがあった。また、模擬店では仲良く話をした男子中学生が、町中でわざとこちらの存在に気づかないふりをしたこともあった。

### ・学生ボランティア・10代女性および10代男性

10代女性は、休日にスーパーマーケットで保護者と一緒にいた男子児童と出会った際に目が合い、お互いの存在に気付いた。しかし、児童が保護者と一緒であったこともあり、学生の方から話かける勇気が出ず、何も接触しないまま、その場を去ってしまった。学生ボランティアは、2名とも平日は18時まで大学にいたため、夜ほとんど出歩かない児童と町で会える機会がなかった。

## 3. 同地区の納涼祭での児童たちの言動

調査で訪問した2箇所の納涼祭とも、地元住民によるジュース、焼きそば、フライドポテト、焼き鳥、チュロス等の屋台が1店舗ずつ出店されていた。同じ児童が同

じ屋台に複数回寄ることは無く、ほぼ全員が1回のみで、2回寄った児童は友人の付き添い等の理由からであった。児童に何度も屋台に並ばない理由を聞いてみると、主に「値段が500円、600円と高額であり、すぐにお小遣いが底を突いてしまうから」という主旨の意見か、「ひとつ買って食べれば十分満腹感が得られるから」という意見のどちらかであった。屋台の店員との会話はほとんど無く、売買の際の必要最小限のやりとりであった。時には注文の一言しか発しない児童も全ての学齢層で目立った。会話が弾んでいる場面は、店員が児童と地元の知り合いであるケースに限られていた。

## IV. 考察と課題

### 1. 新見市が目指す「地域で子どもを育てる体制作り」への新たなアプローチ

新見市は2015年3月に「新見市子ども・子育て支援事業計画～家庭を源に、地域全体で子どもを育てる都市～」において、子どもを地域全体で育てていくことの重要性、必要性について以下のような提示を行っている。

- ・核家族化や少子高齢化、地域のつながりの希薄化が進む中、家庭における教育力の低下が指摘されており、今まで以上に学校、家庭、地域が連携しながら社会全体で子どもを見守り育てていくことが求められる。
- ・地域における子どもの減少により、遊びを通じた仲間づくりの機会が減少するなど、社会を通じた人間形成の機会が失われつつある。このため、すべての子どもが様々な体験活動や学習、地域との交流に自主的に参加できる場づくりを進めることが求められている。

また、以下の実践の強化、継続についても言及している。

- ・地域の団体、警察、行政等の連携や、「見守り隊」による地域での積極的なあいさつや声かけを促進し、「地域の子どもは地域で育てる」意識の向上に努める。
- ・地域の団体、警察、行政等が連携し、学校付近や通学路におけるパトロール活動を強化する。また、保護者や地域住民で組織する学校安全ボランティアに対して防犯に関する知識の普及を図る。

新見市の小学校では、登校時は朝7時半頃から8時頃まで、下校時は14時半頃から15時半頃まで、見守り隊の大人が大きな声で児童たちと挨拶や会話をしながら安全面に配慮した誘導を行っている。また、2007年より総務省の主導で「地域児童見守りシステムモデル事業」が始まったが、新見市でも携帯電話と電子タグを利用した、児童の校門通過検知と位置情報表示システムが整備され

つつある（総務省，2009）。しかし，児童の登下校時を除くと，市民と児童の接触は家族同士以外はほとんどなく，地域住民の目によって児童が見守られている環境であるとは断言できない。言うまでもなく，住民が児童に対して無関心であると，地域防犯上，町に危険な隙間を作ってしまう。児童虐待の早期発見，通報等も，地域住民の無関心によって妨げられる。地域住民の目による事故・事件・犯罪の抑止力は非常に重要である。

## 2. 駄菓子屋模擬店の教育福祉的特性

前節の調査結果から，駄菓子屋模擬店の環境特性として以下の点が指摘できよう。

- ・駄菓子屋の雰囲気は楽しい上にリラックスしていて，児童がボランティア店員と会話をしやすい環境であった。
- ・一般的な模擬店や祭りの屋台は，商品を1品に絞って販売していることや，1品あたりの値段が児童からすると高いため，一度購入したら二度足を運ぶことはほとんどない。一方で駄菓子屋模擬店は様々な商品があるため飽きにくく，また，低価格で児童が安心して買物ができるため，児童は何度も駄菓子屋模擬店を訪れ，その結果，ボランティア店員と会話する機会が多くなっていた。
- ・駄菓子屋模擬店は他の一般的な模擬店や祭りの店舗のように，売買を最も重視した運営ではなく，買わずに眺めているだけの姿も他者の目に異様に映ることはないため，児童とボランティア店員の両者に会話を楽しむ余裕が生まれていた。
- ・ボランティア店員は模擬店で会話を交わしたり，会話こそしなくても何度も目にした児童を明確に認識できていた。また，店員のことを覚えて帰宅した児童も多かった。そのため，駄菓子屋模擬店終了後に児童と市内で再会した時に，お互いに挨拶や会話を交わすまでの関係性を結ぶことができた。
- ・ボランティア店員が児童を単なる「お客さん」として捉えるのではなく，売買以上に会話を重視したことにより，お互いに親しみを感じるようになっていた。そして，店員はその後の日常の児童の姿にも関心を示すようになった。また，毎年駄菓子屋模擬店に来る児童や，かつて来たことのある児童の成長を，店員は具体的に把握できていた。

以上より，駄菓子屋模擬店にはボランティア店員と児童が短時間で親密な人間関係を築く特性が備わっており，そこから両者は地域における繋がりへと発展させることも可能であることがわかった。

東日本大震災後，被災地の保育園，幼稚園の子どもや

保護者，保育者に安心して飲める水を届ける支援活動を4年間定期的に行っている団体を筆者が調査した際，保育者から「保育者や保護者以外の大人が子どもを見守ることの重要性」について，以下のような感想を得た（2014b）。

- ・訪問の度に相撲をとり，子どもの押す力が強くなっていることを実感してくれたり，津波の恐怖から，強風で大きな音がするといつも号泣していた子どもが，大きなザリガニをつかめるまでに成長した姿を見届けてくれたりしている。保護者や保育者といった関係者以外の大人が，子どもの成長を見守り続けていることの重要性，素晴らしさを学ばせていただいた。

新見市の子育て施策において掲げられている「家庭を源に，地域全体で子どもを育てる都市」という基本理念の具現化にアプローチするためには，同じ地域で暮らす大人が子どもたちに関心を持ち，子どもたちを常にあたたかい目で見守る社会に変えていく必要がある。それを達成するためにも，今後は，今回検証した駄菓子屋模擬店の持つ教育福祉的特性を取り入れた「場」を市民に提供する方法や手段等について具体的に考えていき，地域に貢献できる議論に発展させていきたい。

## 3. 今後の課題と展望

今回の駄菓子屋模擬店でボランティアを努めた市民と学生は，18歳から32歳という幅の狭い年齢層となってしまった。今後は40代以上の男女のボランティアによる検証や，より多くの市民にボランティア参加していただくことで，「地域全体による見守り環境」の実現にむけて実践的検証を行っていきたい。さらに，大学構内のみに留まらず，新見市内各所にて開催し，新見市各所において効果を得られるよう，発展的に研究を進めていきたい。

## 文献

- 岡山県新見市子ども課：新見市子ども・子育て支援事業計画－家庭を源に，地域全体で子どもを育てる都市，2015。
- 総務省情報流通行政局：岡山県新見市・スクールiネット事業，地域児童見守りシステムモデル事業・事例集，106-109，2009。
- 松田道雄：駄菓子屋楽校－小さな店の大きな話・子どもがひらく未来学，新評論，2002。
- 松田道雄：生涯にわたって社会のいたるところで学ぶための方法序説－駄菓子屋の社会教育力，社会教育，65（7），70-73，2010。
- 八尋茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み，

- 新見公立大学紀要, 32, 195-197, 2011.
- 八尋茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み  
2, 新見公立大学紀要, 33, 165-167, 2012.
- 八尋茂樹：駄菓子屋模擬店運営による地域貢献への試み  
3, 新見公立大学紀要, 34, 125-128, 2013.
- 八尋茂樹：駄菓子屋模擬店運営を通じた児童文化的社会  
貢献と保育学生の学び, 新見公立大学紀要, 35, 145-  
148, 2014a.
- 八尋茂樹：幼児をもつ保護者の放射線不安を軽減するた  
めの児童家庭福祉的支援の試み：被災地の幼稚園にペッ  
トボトルの飲料水を届けるボランティア活動を通して,  
新見公立大学紀要, 35, 81-84, 2014b.

注

- 1) 今年度も貼り紙2枚に渡り「この模擬店は研究のため  
にビデオ撮影しています。ご協力ください」, 「記録  
したデータは研究以外に使用いたしません。本研究に  
関するご質問やご意見等ございましたら, 店員に遠慮  
なくお申し付けください」と模擬店入口付近に提示し  
た。

